



Title	巻頭の辞
Author(s)	松沢, 弘陽
Description	富田容甫の肖像有
Citation	北大法学論集, 36(1-2)
Issue Date	1985-09-30
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/16983">https://hdl.handle.net/2115/16983</a>
Type	other
File Information	36(1-2).pdf





## 巻頭の辞

昭和五九年六月二三日早暁、われわれの敬愛する同僚富田容甫教授は忽然として世を去られた。その一周年を期にしてわれわれは、追悼の思いをこめて本誌三六卷一・二合併号を同教授の靈前に捧げる。

富田教授は、昭和二三年東北帝国大学法文学部を卒業され、同年北海道帝国大学法文学部助手となつて尾形典男教授のもとで研鑽を積み、昭和二七年から北海道学芸大学に助教として勤務された後、同三二年に本学部助教教授に転じ、同三七年には教授となつて逝去の日にいたつた。本学に帰られた後の同教授は、教養課程の政治学、本学部の政治学（のち政治学第一部）および大学院法学研究科の講義と演習を担当された。

学生や同僚と学問についてくつろいで語ることをこよなく愛した教授であつたが、求められて管理運営の任につかれると類いまれな責任感をもつてその衝に当り、すぐれた見識と力柄を余す所なく発揮された。特に昭和三二年から四二年まで教養部教官として、草創期の教養部の諸制度の整備を完成し、さらに同五三年から翌年までは北海道大学入学者選抜制度調査委員会委員長として、共通第一次試験に対応する本学第二次入学試験制度創設の衝に当るとともに、年来の入学試験実施体制の抜本的な改革を実現されたことは、本学の歴史に残る貢献といえよう。加えて、昭和四〇―四四年、五一―五二年にかけて、前後四年八カ月にわたつて法学部選出の評議員をつとめ、その識見によつて本学の運営に大きな寄与をされている。

この間政治学の研究においても、小川晃一教授の別稿に詳説されるように、政治の原理論から投票行動の実態調査ま

で、広い範囲にわたって開拓的研究を進めて、わが国の戦後の政治学に貢献され、早くから日本政治学会に属して、昭和四三年から四五年までは理事として学会の運営につくされた。

しかしこれら管理運営の仕事と研究に骨身を削りながら、富田教授がそれらに勝るとも劣らぬ力を注がれたのは教育であった。法学部において展開される講義や演習の中で、同教授のそれは、多くの学生の心をとらえる点においてぬきんでていた。そしてそれは、「価値に導かれる行為の主体としての人間」を出発点として人間の秩序形成を問うという講義の主題と、教授がまれに見る「対話型」の教師であったということによる所大きいように思われるのである。

けれども公私にわたる余りにも重い負担は富田教授の健康を次第にむしばみ、その中でお入試制度改革等の激務に当られたことが、病を一層悪化させた。ようやく昭和五四年に入学者選抜制度調査委員会委員長の激職を解かれた頃には、長年の心身の過労がもたらした自律神経失調と高血圧症のため、心臓動脈瘤を始め内臓諸器官に重度の機能障害がひろがっており、四回の入院を重ね、大手術を受けられねばならなかった。

しかも富田教授はこのような状態の中で毎週の講義と演習のために力をふりしぼり、さらに、近づく定年退官を前にして、「人間の学としての政治学のために」と題する講義ノートの完成・発表と、退官後にわたる「現代日本人における『国家』イメージと『政治』イメージ」と題する大きな研究を構想された。それは、学業半ばに天皇制国家の戦争に動員されて、「このような経験を通して、私の心のなかに『国家とは人間に殺人をまたその死を命じる個人超越的な実体』であるというimageが疑う余地もなく定着」したとし、「戦後の私の思想の核は、いかにしてこのような『国家image』による呪縛を断ち切るかという点にあったように思う」（断片的ノートの一節）と記される同教授にとっての、まさにライフ・ワークとして構想されたように思われる。

だが思いのほか悪化していた病は、同教授が最後の力をかたむけて着手された企てをも早々にそして突如として挫折

させたのである。学問を愛した富田教授にとって、どんなに無念だったことか、思いなかに過ぎるものがある。けれども本誌本号は、紙の上に印刷されたしを多くは残すことが出来なかつた教授が、その生き方を通じて、彼を理解する同僚の心に消え難いしを残されたことをあかしするものといえよう。

昭和六〇年九月

北海道大学法学部長 松 沢 弘 陽